

いとされ、PMの予後に重大な影響を与えると考えられる。

## 12. 原発性肺高血圧症の剖検例について

(第二病理)

○藤波 睦代・森本紳一郎・西川 俊郎・  
佐藤 昭人・梶田 昭

原発性肺高血圧症(PPH)の8剖検例を比較、肺外・肺内動脈の形態的变化を検討した。当教室における昭和60年末までのPPHの剖検率は0.19%(8/4141)であった。年齢は16~37歳、男女とも4例である。肺動脈枝の病変は半定量的に検索し、Heath & Edwardsのgradingに従って評価した。1. 肺外肺動脈に瘤状拡張が認められた2例は経過が著しく長い(18, 9年)。これらの顕微鏡的末梢肺動脈変化はGrade IV, IIにとどまった。2. PA/Aoの周径比は平均1.4、対照のnon-PPH例で1.1であった。3. 中膜肥厚は、終末・呼吸細気管支に伴う動脈レベルに強い。4. 内膜増生はconcentricな形が主であった。5. plexiform lesionは5例に見られ、elasto-fibrosisの進んだ古いものもあり、内腔に血栓はほとんどない。6. angiomatoid lesionと壊死性動脈炎は各々1例に見られた。7. 8例中、Grade II, IIIが1例ずつ、Grade IVが5例、Grade VIが1例であった。

## 13. 嚢状動脈瘤の迷入を伴った先天性と思われる食道気管支瘻の1例

(胸部外科) ○村杉 雅秀・和田 寿郎

(第一病理)

武石 詢・豊田 智里・金田 良夫・  
岩崎 智彦・寺岡 邦彦

(腎センター外科) 中沢 速和

成人における食道気管支瘻の大部分は、悪性腫瘍、外傷、炎症等による後天性のものであり、近年悪性腫瘍の増加とともに経験することも増えて来ている。しかし、いわゆる先天性食道気管支瘻は、極めて稀とされている。

今回、我々は、突然の咯血により死亡した症例の剖検にて、嚢状動脈瘤の迷入を伴った先天性と思われる食道気管支瘻を経験したので報告する。症例は腎癌術後の59歳男性である。剖検時、両肺下葉に鷲卵大の転移、左肺に嚙下性肺炎、及び左主気管支に開口する直径約0.5cmの食道気管支瘻とその交通部に突出する大豆大の大動脈瘤の形成ならびにその破裂を認めた。その周囲には腫瘍・炎症等の所見は認められず、先天性と思われた。

## 14. 小児結節性硬化症の生検皮膚の病理組織学的検討

(小児科) ○斎藤加代子・原 美智子・  
岡田 典子・福山 幸夫

(第二病理)

○豊田 充康・笠島 武・梶田 昭

結節性硬化症の病変を構成する細胞の特徴を検索するため、免疫組織化学的に皮膚病変を解析した。対象は6カ月から15歳2カ月の本症7例。顔面皮疹、白斑、頤部小結節、爪線維腫。方法は病変部位の皮膚を局麻下にパンチ生検し、一般病理組織染色のほか、抗S-100蛋白、抗GFAP、抗NSE、モノクローナル抗S-100( $\alpha$ )、抗S-100( $\beta$ )、OKIa、OKT6を用いて、ペルオキシダーゼ酵素抗体間接法を行なった。顔面皮疹3/4例、白斑4/7例、頤部小結節1/1例、爪線維腫1/1例でみられる真皮内に増殖した細胞は、一部がS-100蛋白陽性であり、血管周囲性または血管と関係なく、真皮内に分布していた。GFAP、NSE、S-100( $\alpha$ )は陰性であり、S-100( $\beta$ )、OKIa、OKT6の陽性細胞が程度の差はあるが、ほぼ同様な部位に分布していた。本症の皮膚病変で真皮内に認められる細胞成分の中に抗原提示細胞の免疫学的膜性状を有する細胞の存在が示唆された。

## 15. 回盲部X線解剖よりみた生体における正常所見の考え方

(第二病院放射線科)

○石原 純一・木口 富恵・鈴木 葉子

生体における回盲部の正常所見(標準所見)とは如何なるものかをX線解剖学の立場から考えてみるとそこにはいくつかの問題が生ずる。今回は盲腸部を中心に検討したが、従来示されているような標準的な形態が検査継続の過程においてこれとは異った状況(異常所見)に変化するあるいはこの逆もあるといったような接した時点により正常・異常が左右されるのではないかとする症例、検査手技の充実ひいては検者の注意力和熱意が望まれる症例、体位の相違により正常像・異常像の解釈が異ってくる可能性のある症例などについて述べた。X線検査はその性格上腸管内腔の描出が中心となり、腹膜や血管なども含めた周辺との関係を定めるには一定の制約を受けるが、生体における状態を知る有利な手段として解剖学的にもより精細な知見の把握が望まれる。